

アメリカ LA アート&デザイン環境研究

RESEARCH ON THE ART & DESIGN ENVIRONMENT IN LOS ANGELES

.....
廣中 薫

芸術工学部ビジュアルデザイン学科 准教授

Kaoru HIRONAKA

Department of Visual Design, School of Arts and Design, Associate Professor
.....

要旨

筆者は2016年7月1日から9月28日まで、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスおよびその近郊に滞在し、ロサンゼルスのアート環境から学ぶ現代的で豊かなイメージの作り方とアートの活用について、研究活動を行った。

上記期間において、海外派遣研究の招集元である、カリフォルニア州立大学ドミンゲスヒルズ校 (CSUDH) 芸術・人文学部アート&デザイン学科のデボン・ツノ准教授、およびオックスナード・カレッジのリベラルアーツ部門・アートコースで教鞭をとるイリエ・イチロウ氏のもとでの研究を行い、併せて、期間中の拠点とした2箇所の“アーティスト・イン・レジデンス”での作品制作、人的交流、展覧会に精力的に取り組み、さらに帰国時には本学において成果展覧会を実施した。

本稿において、これら期間中の一連の活動について報告する。

Summary

I stayed in Los Angeles and its suburbs in California, USA from 1 July to 28 September 2016 and conduct research activities on how to make modern and rich images to learn from the art environment of Los Angeles and to utilize art It was.

I was invited by Associate Professor Devon Tsuno of CSUDH and Ichiro Irie of Oxnard University and conducted research as a dispatched researcher abroad.

At the same time, we conducted work creation, personnel exchanges and exhibitions at "Artist in Residence" in two places during the period. In addition, at the time of returning home, we conducted outcomes exhibitions at our university.

In this paper, we report a series of activities during these periods.

1. はじめに

筆者は2016年7月から9月に、本学海外派遣研究員としてロサンゼルス(以下 LA)に滞在し、現地のアート環境から学ぶ、現代的で豊かなイメージのつくり方とアート活用についての、実践を含む研究活動を行った。

形態や色、表現の中に自由を感じるアメリカのクリエイティブは、作家自身からの発想を重視し、アカデミックな教育は遠いという印象があるが、それらを教育現場、現地の様々なカルチャーへの接触、さらに制作の現場から確認した。また LA アートで多用されるメディウム画材での表現法を追求し、実作に反映させることも大きな目的のひとつである。

上記の目的に基づき、今回の派遣研究における活動環境としてアーティスト・イン・レジデンス(以下 AIR)を活用した(図1・2)。



図1 AIR[Eastside International] (7/3~7/25 滞在)



図2 AIR[18th Street Arts Center] (8/12~9/28 滞在)

AIR は生活拠点としての宿泊機能と、アーティストのための制作スペースおよび展示発表のための環境が用意されている。LA 地区の AIR は地元在住アーティストのための長期滞在型ローカルプログラムと、海外からの訪問アーティストのための1~3ヶ月の短期滞在プログラムが存

在し、常にアメリカ西海岸のローカルアートが発信され、訪問アーティストとローカルアーティストとの交流が図られている。筆者は短期滞在プログラムを活用して、期間中の研究拠点として活動を行った(図1・2)。

2. 派遣研究前半(2016年7月3日~7月25日)

ロサンゼルスに位置する AIR である Eastside International (アートの複合施設)に拠点を置き活動した。今回の派遣研究の招集元であるカリフォルニア州立大学ドミンゲスヒルズ校(CSUDH)の准教授であるデボン・ツノ氏の案内により、大学施設の視察及び氏が指導する授業の見学を行った。CSUDHはLA郊外に位置する総合大学で、6つの学部のうち人文学部において、アートに関する複数のコースを設置しており、デボン氏はアート・デザインのコースを担当している。

デボン氏が指導する教室には、アイデア誘発のための素材として、壁一面に数百冊のカラージュ用の雑誌本棚コーナーが設置されており、学生の共有資材として随時自由に切り取り使用を可能としている。ここでは、資材選択・収集・授業への取り入れ方・保管方法を確認した。実習授業においては、毎授業の終盤に基礎と絡めたまとめ学習が行われる。iPadでのインタラクティブな学習アプリ(一例として、イエール大学のデザイン・アプリ)が活用され、スピードと明確さを伴った学習補強を行っていた(図3)。



図3 CSUDH デボン・ツノ氏授業風景

CSUDHの教室環境は、自発的に作業しやすく、発想から制作へスムーズに移行できる工夫がなされている。設備例として、2色調整可能な光源(例:一教室に白熱灯(80本)、蛍光灯4列(230本))、展示用壁・大画面制作用壁、大きな作業机(二段式で下段に作業資材、上板面で作業)、専門的なデッサン用のイーゼル、音響設備が設けられており、付

帯設備として大型の粉塵吸引機、ボイラー式の水場タンク、焼却炉、更衣室やシャワー設備が設けられ、安全性を確保し、かつ制作場所として他者との距離感・視線交差にも配慮された中で制作が行われていた。共同スペースとしてのアトリエの内部はホワイトキューブ的に保たれ、隣接している部屋は倉庫として制作作品・資材・モチーフが合理的に収納されていた。これら良質な環境と、教員による時間配分や指導を入れるタイミングなど、集中力を高め作品の質を上げるファシリテートは、大変参考になった。このほかデボン氏とは後半の派遣期間で行う本学廣中ゼミとの共同授業や、交流展実施に關しての打合せを行った。

同じく LA 近郊の Oxnard College (以下 OC) において、リベラルアーツ部門・アートコースの教員イリエ・イチロウ氏の招きにより、氏のクラスの授業見学を行った。イリエ氏の方針は、「2つの事項を参考」にさせ、事柄を横断させることにより、対象物を多様な方向から眺める習慣付けを行うもの。より多彩な発想を生み、客観視を育む一方、見識も広めるべく授業最後には、必ず基礎と絡めてまとめが行われ、反復的な確認作業を学生に課している。時間をかけて行うコラージュ作業では、web・アナログ両方からの視点と基礎を絡めた作業を積み重ね、強い個性を作り上げる実践の場となっている(図4)。



図4 Oxnard College イリエ・イチロウ氏授業風景

LA アートシーンの視察の一環として、ダウンタウンのアート再生地区の巨大壁画やケニー・シャーフ、クレオン・ピーターソン、レトナ等の建築壁画など、LA を象徴するストリート・カルチャー(アート)への接近も行った。ストリート系ギャラリーも存在し、その製作現場を直接訪れ、使用されている画材とそのテクニック、色使い、また屋外構造物ゆえの退色・劣化等についても調査を行った。

過剰でパワフルな主張をもつモチーフでのダイナミックな描き方、スプレーの多様な使用法など、特徴ある画面構成は、壁画の鑑賞視点の距離・高さの点で日本と大きく異なる要因であり、自身の制作において大きな示唆を得ることができた。

その他多数のギャラリー・美術館を視察、展示構成も含めた情報収集を重ね、並行して進める画材研究の実践として、拠点とする AIR で、2つのイベント(展示会)を実施した(図5・6)。



図5(左)「Art Crinic」筆者含む4作家によるトークイベント
図6(右)「Kaoru HIRONAKA OPEN STUDIO Exhibition」
(公開制作)

この他、Azusa Pacific University での授業視察、LA 在住作家のアトリエ訪問等を行うが、本学での業務のため7/25をもってAIRを引き払い、一旦帰国の途についた。なお帰国中に取り組んだ鎌倉市立今泉小学校での壁画制作では、同市立岩瀬中学校美術工芸部の生徒と協働を行ったが、ロサンゼルスでの調査に基づく考察を実践することができた。派遣研究活動外ではあるが、一連の研究テーマの中で連続性をもつ取組みの一つとして追記しておく。

3. 派遣研究後半(2016年8月12日~9月29日)

サンタモニカのAIRで、アート複合施設の18th Street Arts Centerを拠点に活動した。

CSUDH及びOCでの授業視察を継続して行い、指導の特徴と学生への影響を確認した(図7)。またCSUDHと本学とのSkypeによる共同授業において、本学との合同展覧会『LA KOBE 交流展』の共通テーマを全員で話し合い、「MY LIFE, 私の生活」に決定した(図8)。

多国籍・多文化で構成されたCSUDHの学生は、日常会話の中にも“外への意識”(他者・社会・政治)が自然に存在し、日本との意識の違いが印象的であり、このこと

は展覧会テーマの設定に大きく関わっている。



図7 デボン氏授業 エコ・プロジェクト視察



図8 CSUDH と KDU の共同授業風景

4. 成果作品について (派遣研究後半～帰国後)

技術・素材の研究も含めた数多くのリサーチの結果、筆者自身が LA スタイルをどのように消化したかを、展覧会やアートパフォーマンスで展示・発表した。

■Oxnard Green 廣中薫展 (図9・10)

[McNish Gallery (OC 施設) 8/31～9/7]

一軒家ギャラリーの内側全体をラッピングして風景画を再構成。公開制作を行い、交流を図りながらの制作。



図9 (上) ・ 図10(下) レセプション風景と作品

■公開制作展 (図11) ・BAM Festival (図12)

[18th Street Art Center STUDIO #7 /メイン広場 9/24]
ローカル・アーティストと Oxnard College 学生との協働チームでのパフォーマンス企画。



図11 (左) ・ 図12(右)公開制作と BAM でのパフォーマンス

■AMERICAN DRAWING 廣中薫展 (図13)

[18th Street Art Center Atrium Gallery 9/25～9/27]
ローカル・アーティストと CSUDH の学生に参加して頂き、特別イベントとしてパフォーマンスを開催。

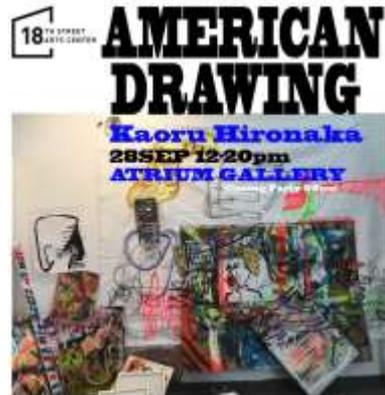


図13 公開制作とパフォーマンスを実施

本研究の成果の一つとして、『LA×KOBE Exchange Exhibition「MY LIFE, 私の生活」文化交流展』(図14)を帰国後に本学で開催している。緻密に配慮された教育に裏打ちされつつも、自由で楽しい表現と色彩感覚、大胆な構図をもつ作品群が、在学生に対し貴重な学びの機会を提供してくれた。

派遣研究期間を通じて、教育現場からも、LA に集まる作家・学生たちからも多くの示唆を得られ、帰国後に取り組むアートによる地域貢献等の方向性・手がかりを得ることができ、さらに実践によって現在も深化し続けているところである。LA での成果と、以降の活動体験で得た知見を学生に還元し、広く共有していきたい。

■LA×KOBEX Exchange Exhibition

「MY LIFE,私の生活」文化交流展(図14~16)
 [ギャラリー・セレンディップ 10/29~11/4]
 CSUDHの大学広報紙に掲載された



図14 展覧会フライヤー



図15 『CSUDH Bulletin』Vol17.no.207(2016.10.5)に掲載



図16 『DOMINGUEZ TODAY』Winter,2017
 (左:表紙・右:掲載ページ(p.17-21))

謝辞

- ・Eastside International ディレクター Jason Ramos 氏 (OPEN STUDIO、展覧会等のディレクション)
 - ・Eastside International アーティスト Loren Britton, Courtney Coomb, Daisy Patton 氏 (「Art Crinc」 イベント共催)
 - ・18th Street Arts Center ディレクター Anuradha Vikram 氏 (OPEN STUDIO、Atrium Gallery 個展のディレクション)
 - ・18th Street Arts Center ローカルアーティスト Irie Aska 氏 (BAM イベント共同企画)
 - ・McNish Gallery(Oxnard College) Christine Morla 氏 (イベント、OPEN STUDIO、展覧会等のディレクション) 株式会社パジコ 木村隆太氏 (個展時の協賛、PADICO 画材等の資材提供)
- 以上の方々と、全てのディレクションに携わっていただいたイリエ・イチロウ先生、本研究にご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

また、筆者の一連の研究において重要な実践機会を与えてくださった小学校壁画制作の関係者の皆様にも、本稿で謝意を表します。

- ・鎌倉市立今泉小学校 三島久司校長、梅谷公雄教頭
- ・鎌倉市役所 教育委員会 岡宏氏
- ・鎌倉市立岩瀬中学校 美術工芸部の皆さん

注

図1・2・16は公式サイトからの転載

図1: <http://www.eastsideinternational.com>

(最終アクセス日 2017.11.20)

図2: <http://18thstreet.org/>

(最終アクセス日: 2017.11.20)

図16: <http://issuu.com/csudh/docs/ Domingueztodaywinter2017>

(最終アクセス日: 2017.11.24)

他の図版は全て筆者制作または撮影。